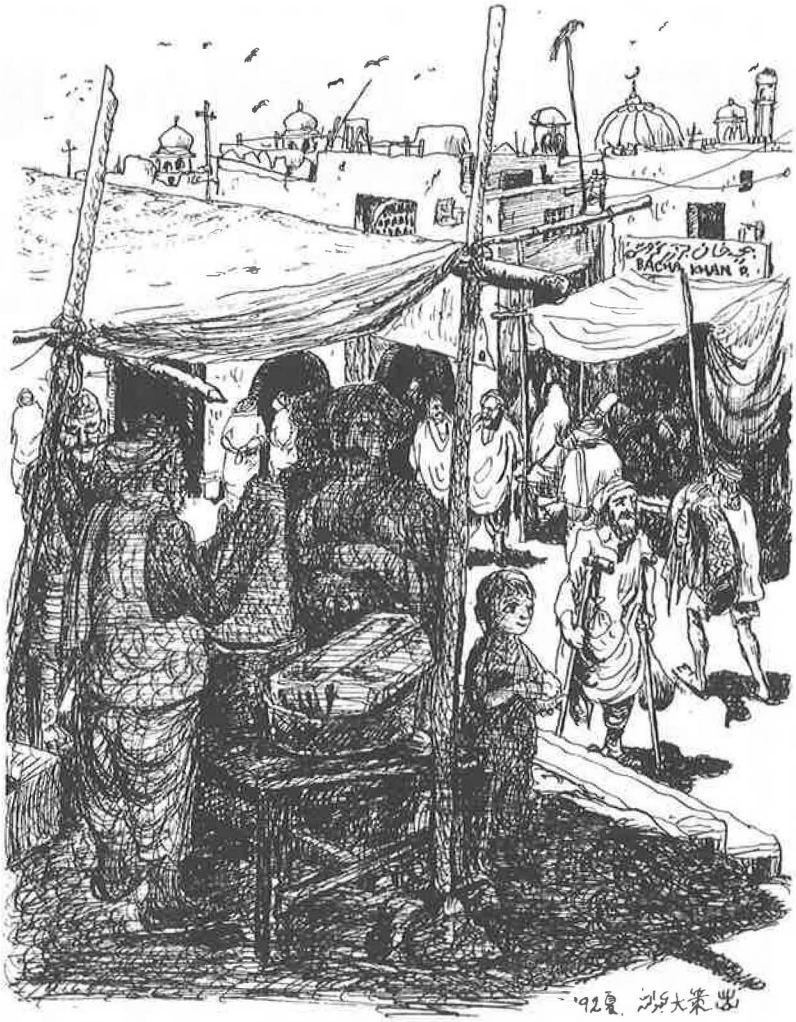
1992年7月25日

ペシャワール会報

No.32



＊1991年度現地活動報告

●国際協力・天動説から地動説へ……中村　哲
●1991年度活動の概況……中村　哲
●スタッフの成長と運営の苦労と……林　達男
●現地の人も私もゆっくりと変わってゆくのだろうか……藤田千代子
●酷暑の前のひととき……松本智子
●再び模索の時を与えられて……島村教子
●91'会計報告……ペシャワール会事務局
●事務局長に就任して……村上　優
●各地からの報告……熊本ペシャワール会／八尾ペシャワール会
●ダラエ・ヌールへの道［国境越え］……中村　哲

表紙絵＊バザール　甲斐大策

ペシャワール会　〒810
福岡市中央区大名一丁目一〇―二五　上村第二ビル三〇七号
電話・FAX　〇九二（七三一）二三七二

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています

国際協力・天動説から地動説へ

〔1991年度を振り返って〕

現場は華やかな国際医療協力のイメージとはおよそ程遠い。地味な仕事の、営々たる積み重ねである。「翔んでる」外国人の遊び場所ではない。手軽に手に入るものは何ひとつない。日本側もまた、JAMS現地が一つの厳しい事業体であることを認識し、自分の都合ではなく現地からの視点・現地に立つ立場を身につけ、空砲ではなく実弾を投入することが求められている。そうしてこそ、日本側も確かなものを分かち合うことができる。

JAMS（日本ーアフガン・医療サービス）顧問医師　**中村　哲**

一九九一年度の政治的概況

ペシャワールでの働きの初めから「流動的情勢」という言葉がくりかえされてきたが、この言葉がこの地域で消えることはなかろう。一九八八年のソ連軍撤退開始、続くアフガニスタン復興援助ラッシュの開始とその終息、内乱の慢性化などの大きな流れはこれまで述べてきた通りである。とは言え、JAMS＝ペシャワール会の働きを理解する上で政治情勢を述べない訳にはゆかない。

一九九一年度の顕著な現地情勢は、紆余曲折を経て、曲がりなりにも和平の兆しが見え、難民の一部は自然に帰り始めた事である。皮肉にも「難民援助」が混乱を増し加え、「援助引き上げ」が難民帰還を促進したのは動かしがたい事実で、一九九二年一月の米露の武器供与停止はこれに大きな拍車をかけつつある。しかし、これを以てアフガニスタンの全面的平和の段階とするのは早計で、戦闘は減っても混乱は更に複雑化している。

「ソ連の分解によって権力の真空状態が生まれ、民族問題が一挙に噴出した」という単純な図式は中央アジアでは当てはまらない。元々西欧的なナショナリズムはこの地域には存在してなかった。カスピ海から中国新彊省、アフガニスタン、北西辺境州まで、地域性と割拠性を保ちながらも、実は地図上で見えない一つの文化圏が存在している。

大ざっぱに見れば、ソ連の崩壊によってこれが露わとなり、ロシア・イラン・トルコ・中国・パキスタンなど、近隣大国の一種の衝突・緩衝地帯という性格が明らかになったと言える。「アフガニスタン分割構想」はアフガン人の憤激を買ったが、一国家としてまとまり得ないという弱点を露骨に示したものとも言える。一種のレバノン化である。最終的には、割拠性を保ちながら緩やかな連合体をなすのが自然な形であり、ここでは民族国家というのが一つのフィクションだとしても過言ではない。

アフガン戦争の後遺症は根深く、大量の武器流入と難民化、政治党派の乱立は不必要な対立を増し加え、農村人口の激減を促進している。追い打ちをかけたのが「難民援助・アフガニスタン復興援助」で、大量の外貨の流入が現金生活と都市化を促進、

自給自足で安定した農村生活に壊滅的に作用したことは言うまでもない。麻薬栽培の激増もこれを背景としている。

ともあれ、カブール政権やゲリラ党派の動向がどうあれ、人々はもはや戦に疲れ切っているのが実情である。ただ、アフガン戦争と難民援助による混乱はイスラム側の反動を強め、イスラム原理主義・排外主義の温床を提供しているのも事実である。

ダラエヌールに着いたDr.シャワリとJAMSのスタッフ

このような混乱の海を泳いで活動せざるを得ない現地の苦労は、なかなか日本には伝わりにくい。そのことを日本側も知っておく必要がある。

自らの発見への努力

ペシャワール会の活動は一九九二年を以て十年目に入る。全く手探りの軌跡であった。やや誇張すれば、会の成長過程はそのまま、日本人の弱さやもろさを引きずりながら、世界と自らを発見しようとする努力であったとも言える。

この間、国際化の声の高まりの中で、ある時は誉めそやされ、ある時は無関心の壁に泣き、ある時は心ない批評に耐え、我々如き取るに足らない一市民団体がよくここまで支えられて来たものだと思う。支える者も、支えられる者も、それぞれの思いを込めて活動に参加してきたに違いない。だが我々は、ただの一度も「哀れな人々に愛の手を」という美辞を並べなかった。それは、現地も日本も大方の者が、支えることによって自らも支えられるという単純な真理に気づいていたからである。

世界の激動の中で

この九年で確かに世界は大きく変化した。くりかえし述べてきたように、ペシャワールは正にその集約を反映していた。冷戦構造における米ソの激突とその犠牲、都市化と工業化による農村の分解、それに伴うアジア伝統社会の変質、人口爆発、環境破壊、内乱、戦争、麻薬、難民、ありとあらゆる発展途上国の苦悩が極端な形で目撃された。更には、イスラム世界の反乱、ソ連邦解体と冷戦構造の崩壊という世界史的な動きの余波を直接こうむった。これは我々にとって、新聞の紙面を飾ることのない多くのアジア世界の現実を鮮明に浮き彫りにするものであった。

国際化も国際援助もそうである。かつては素晴らしく見えた欧米諸団体の大規模な国際協力も、実は多くが張子の虎であり、いとも簡単に人々を見捨てる現実にも遭遇した。現地が彼らにとって自分の興味を満足させたり、業績を上げる対象に過ぎなかったとすれば、「国際的相互扶助」は空文に帰する。JAMSの現地活動は人々に信頼を以て受け入れられ、静かに根を張りつ

つあるのは、我々が上から見下ろすのではなく、いかに小さくとも「人々と共に生きる」努力を貫いてきたからに他ならない。

同様のことは我々ペシャワール会自身にも言える。現地が日本のためにあるのか、会の活動が現地のためにあるのか、という平凡な問いである。どちらも正しい。この現地活動を通して我々は、これを自らの糧とし、人間が失ってはならぬ何物かを知る手掛かりを求めてきた。それも不可欠である。だが、「華やかなイベントや議論の割に中身のない日本の国際協力・国際化」を嘆く資格があるのかという自問は、絶やすべきではなかろう。

時流に抗して

一九九一年度は、JAMS現地にとって、本格的なアフガニスタン国内活動が現実化した記念すべき年であった。一般のアフガン人さえ嫌がる山中に主力部隊を投入し、人が今まで紙の上でしかできなかった困難な作業に挑戦しようとしている。

欧米諸団体の大部分が「アフガニスタン」から撤退しようとする今、時流に抗して、なぜJAMSが活動の拡大を重ねてそんなことをするのか。外国人たちが問うのは馬鹿げている。脚光を浴びれば殺到し、浴びなくなれば立ち去る器用さを我々は持ち合わさない。活動しやすく評価を得やすい所ならば、誰もが行く。我々の答えは単純である。暗ければこそ灯りの価値がある。寒ければこそ火を焚く価値がある。そして灯りは暖かくて明るい方がよい。

JAMSはそのため以外には存在しない。かつて果敢にゲリラ戦を戦ったスタッフたちは、今武器を医療に代え、弾丸を薬品に代え、荒廃した郷土の再建に乗り出しつつある。彼らは戦争の時以上に真剣で生き生きしている。丸腰で現地に入るのは、時には武器を携行するよりも勇気が要るものである。また、複雑な対立をぬって人々の間に根を下ろすのも、外国人が考えるほど容易ではないのである。だが、現地が我々を必要とする限り、そして「平和と支え合い」が一つの巨大な力であることを実証するまで、断じてJAMSの撤退はあり得ない。

一つの厳しい事業体

現場は華やかな国際医療協力のイメージとはおよそ程遠い。地味な仕事の、営々たる積み重ねである。「翔んでる」外国人の遊び場所ではない。手軽に手に入るものは何ひとつない。日本側もまた、JAMS現地が一つの厳しい事業体であることを認識し、自分の都合ではなく現地からの視点・現地に立つ立場を身につけ、空砲ではなく実弾を確実に投入することが求められている。そうしてこそ、日本側も確かなものを分かち合うことができる。そして、現地・日本を問わず、志し半ばに逝った仲間たちの弔いともすることができよう。一九九二年度は、それが大きく問われる年である。

（一九九二年四月五日）

一九四六年福岡市に生まれる。一九七三年九州大学医学部卒。一九八四年パキスタンのペシャワール・ミッション・ホスピタルに赴任。らいのコントロール計画を柱にしたアフガン難民の診療に携わると共に一九八六年JAMS（ジャパン・アフガン・医療サービス）を設立。長期的展望に立ったアフガニスタン無医地区での診療モデルの創出をめざしつつ現在に至る。著書に『ペシャワールにて』（石風社）『ペシャワールからの報告』（河合文化研究所）がある。

一九九一年度活動の概況

1. アフガニスタン復興支援
―農村医療計画

一九八八年以来ＪＡＭＳは、十年以内にアフガニスタンの山村無医地区二十カ所に診療所を配備する計画を立て、公衆衛生活動も含めた無医地区のモデル医療態勢確立を企ててきた。これまで殆ど伝統社会と共存できなかった外国人の保健衛生プログラムとは異なって、独自の現地方式で地元に溶け込み、疾病の予防を含めた地域医療活動を現地の人々の手で、実現しようとする計画である。併せて、らいの多発地帯に活動を展開、一挙にらい発生の息の根をも止めるものでもある。

アフガニスタン国内診療所の開設
［ダラエ・ヌール診療所］

一九九一年度は、やっと念願の国内活動の橋頭堡を得た。アフガニスタン難民問題は新段階を迎え、「難民キャンプ診療所」は一九九一年度を以て一応の決着がついたものと見なす。一九九一年一二月、アフガニスタン・クナール南部のダラエ・ヌール渓谷の中央に診療所を設置、一九八八年以来このために訓練に耐えてきたＪＡＭＳの主力は一斉に勢力を集中し始めた。一九九一年八月から同地区での具体的準備に入り、一九九一年一二月に診療所を開設した。通過地点の戦闘が下火となった一九九二年二月始めから本格的な輸送を開始、一九九二年三月までに一一名のスタッフが交替制で配備され、基本的な基礎を固めた。

同診療所の設置計画は過去二年以上をかけて進められてきており、実情はかなり把握されているが、一九九二年度は外来を中心にする診療活動で地域住民の信頼を得、その後に母子栄養・予防接種などの公衆衛生活動に入る。現在、ＪＡＭＳは「診療カード」の配布で同定番号を定め、これを整理して事実上の戸籍登録実施を開始、二年後をめどにワクチン接種や疫学調査の下地を作りつつある。

ダラエ・ヌール渓谷は典型的なアフガニスタン山岳地帯で、約七～八万人が居住し、現在はほぼ完全な自治体制にある。下手はアフガニスタン戦争中に爆撃で荒廃し、二～三万名が難民としてパキスタン側に難を逃れた。医師はおろか安価な医薬品でさえ入手できない。乳幼児死亡率は想像を絶する。人々の生活も数世紀は取り残されている。大きな戦闘は収まっているが、医療福祉などの不安から帰郷できない者も多い。

このため、ペシャワールでの都市生活に慣れた一部スタッフが反応を起こして現地滞在を拒否したが、ＪＡＭＳは強硬路線を使って、医師一三名中七名、検査技師九名中二名を整理、背水の陣を敷いて備えている。しかし、新たな人員の補充と訓練は確実に続いており、一九九二年三月末現在、ＪＡＭＳ現地スタッフ総数五七名を数えている。

らい多発地帯（クナール州の七十～八十％のらい患者が居住）であるダラエ・ピーチ渓谷は現在複雑な政争で大きな活動ができないが、既に調査準備を完了した。ダラエ・ヌール渓谷から山越えで二日の近距離であるので、次の活動展開は容易となる。ＪＡＭＳペシャワール診療所の教育体制を充実して向こう二～三年で新たに約百名を増員予定、さらに奥地の無医地区とらい多発地域に大攻勢を準備している。

ペシャワール基地診療所の拡充

一九九〇年度に引き続き、検査部を充実して人員を増し、ＪＡＭＳペシャワール診療所は医療教育機関としての性格を持つようになった。総診療数は前年度の2倍以上の伸びを見せた。

母子衛生へのニーズも高く、将来のために「母親教室」も継続されている。

診療患者の大半は、マラリア・腸チフス・

●1991年度のＪＡＭＳの診療実績

全診療所外来診療数；44,548 名		**全診療所総検査件数**；33,705 件	
（ペシャワール診療所）			
外来患者総数	29,158 名	総検査件数	25,413 件
入院患者総数	398 名	血液一般	5,507 件
手術件数	5 名	生化学検査	2,282 件
キャンプ診療回数	34 回（34日）	尿・便検査	14,369 件
キャンプ診療患者数	5,134 名	Ｘ線撮影	1,582 件
鍼灸治療	106 名	腹部エコー	197 件
（テメルガール診療所）			
外来患者数	7,490 名	総検査件数	7,954 件
（ダラエ・ヌール診療所）＊			
外来患者数	2,660 名	総検査件数	338 件

＊1992年2月-3月の2カ月間。1991年1月は正確な記録なし。

アメーバ症などの感染症、外傷などに対する小外科処置である。腹部超音波機械の導入と、林X線技師の長期滞在で診療の質はさらに向上した。

2．らい根絶計画への協力

パキスタン北西辺境州のらい根絶計画への協力も、一九九一年度には新展開があった。従来ペシャワール・ミッション病院を介して行われてきた活動は、州政府とＪＡＭＳ＝ペシャワール会との直接契約・直接協力となった。ミッション病院のらいセンター建築は一九九二年二月二三日に正式に落成したが、これを機にペシャワール会は病棟管理から一時手を引き、小規模な技術協力・人員派遣に留めることになった。

この背景には、ミッション病院全体の管理が困難となり、必要な活動が自由にできなくなったこと、ＪＡＭＳの教育機能充実にさく余裕がなくなってきたことがある。

北西辺境州政府の福祉行政の一角へ

北西辺境州・アフガニスタン共に、そのらい根絶計画上の弱点は、①女性患者発見率の低いこと（一九九一年は二十％以下）、②遠距離地居住患者の合併症治療サービスが行き届かぬこと、である。このため、ＪＡＭＳは直接州政府の福祉行政の一角に身を置き、州のフィールドワーカーたちと協力、州全体ににらみを利かす戦略に切りかえた。一九九二年三月には州政府厚生省の活動許可を得た。

一方将来を見越してアフガン人スタッフのらい診療能力向上が痛感され、ＪＡＭＳペシャワール診療所内に新たに二十床のらい病棟開設に着手、一九九二年三月に着工した。これによって、これまで「アフガニスタン」と「ミッション病院」とに分散していたＪＡＭＳの勢力を事実上一本化、機能的な協力が予想される。

（ＪＡＭＳ診療部らい病関係）

定期投薬	のべ二三三名
接触感染調査	一四五名
らい菌検査	七七一件

北西辺境州北部国境のテメルガール支部を従来どおり機能させると共に、アフガニスタン国内のダラエ・ヌール診療所設置によってアフガン人患者の定期投薬は容易になりつつある。こうして、北西辺境州政府と直接全面協力する態勢が整った。

アフガニスタンのらい最多発地帯のひとつ、ダラエ・ピーチに活動の足固めがされつつあり、さらに有効な協力が期待できる。

ミッション病院らいセンター

入院治療サービスは、日本からの三名のワーカー派遣で改善された。理学療法が難点であるが、人員不足で手が回らないのが現実で

ミッション病院1991年度の実績

（入院・外来治療サービス）

総外来数	866 名	総手術例	69 例
総入院数	244 名	菌検査数	410 例

理学療法　のべ約2,400 例（うらきずギブス例145名，その他は正確な記録なし。）

（サンダル・ワークショップ）

1990年度総生産数	826 足	総配布数	644 足

（ペシャワール地区・フィールドワーク）

出動回数　29 回

（ペシャワール大学・カイバル医学校の医学生への講義）

講義回数	16 回	受講者数	188 名

ある。

一九九二年度事業計画

(1)アフガニスタン無医村診療態勢確立による復興支援

(2)パキスタン北西辺境州・アフガニスタンのらい根絶計画支援

今後も以上の大目標に変更はあり得ない。大きな一九九二年度目標としては、以下の計画も立てている。

アフガニスタン国内診療所

一九九二年度は、さらに和平の動きが加速されるが、ロシア・中東情勢と絡んで政治的な混乱そのものは続く。しかし、国内活動を展開しやすくなる条件はさらに整うものと分析される。一九九二年は開設されたばかりのダラエ・ヌール渓谷の診療所を充実、来年度へ向けて疾病予防の母親教室、結核・らいなどの慢性感染症に対する登録制・定期投薬体制を完成させる予定である。詳細は「ダラエ・ヌール渓谷診療所計画（一九九一年一二月）」参照。プランはほぼ予定通り進行しつつある。

ペシャワール診療所の教育機能充実

大規模ではないが熱帯病の臨床訓練施設とし、日本からの若い医療関係者も受け入れる。昨年度の失敗に鑑み、特に態勢の整った教育コースを開設しないが、教育陣を充実して診療を通して学べるよう工夫する。医師のみならず、検査技師、医療助手、X線技師などの技術も現地アフガニスタン人が自然に学べるようにする。

このため、日本からのボランティアは専門技術者ならば最低二週間、現地ワーカーの場合は約一年以上をメドに受け入れる。

らい診療部の設置
北西辺境州らい根絶計画協力

諸般の情勢により、らい診療部（二十床）をペシャワール診療所内に設置（一九九二年三月着工）。アフガン人スタッフのらいに関する診療能力を増すと共に、北西辺境州らい根絶計画の弱点を補うべく州政府の福祉行政の一環として協力する。即ち、協力相手を北西辺境州政府とする。協力内容については既に直接政府と協議が成立しており、女性患者の早期発見と遠隔地患者の治療サービスに力を入れる。ミッション病院らい病棟については、大きく管理に関与しない。但し、従来の合併症治療サービスを妨げるものではない。

スタッフの成長と運営の苦労と

JAMS放射線技師　林　達男

レントゲン撮影の指導

昨年十月から十二月までと本年二月から四月まで、ペシャワールのJAMSでアフガン人スタッフと共に働いてきました。

彼等は十四年前、ソ連の侵攻により逃れてきて以来、いつの日にか帰るであろうアフガニスタンの生活を夢見つつ頑張っています。このJAMSは、アフガン人のためのアフガン人による医療施設として設立されましたが、ここではアフガン人の若者を医療人（看護士、検査技師、薬剤師、レントゲン技師）として教育し訓練することも目的としています。

私の仕事は四十年の経験を生かして現地の若者たちが、レントゲン撮影に熟達するように指導することです。私で何か役に立つならばと思い、行ってきました。

言葉は通じなくとも

JAMSには中国製の50MAの小さな装置が一台あるのみです。器具も不足しています。十二月に一時帰国した折に日本の技師仲間にお願いして中古のカセッテ（レントゲンフィルムの取り枠）やグリット（X線フィルター）、胸測計などを寄贈して頂き、二月に持って行きました。そのお陰で美しい、良い写真ができるようになりました。感謝です。

シャワリー院長も大変喜んでくださり、「林、パスポートは私が預かっとこうか」とジョークを言ってました。暗に帰るなと言うことです。言葉は通じなくても心が通えばなんとか理解できるものです。毎日楽しく暮らしてきました。

患者さんを診るJAMSのスタッフ

念願の国内診療所開設

ところでJAMSの運営のことですが、JAMSは日本のペシャワール会の支援で成り立っています。皆様の熱い思いと、会費とご支援くださった寄金がすべてです。スタッフの生活は決して豊かではありません。彼等のサラリーはできるだけ押さえて、入院患者や毎日来る多くの外来患者の医療費にすべて投入されるのです。

また今年二月に中村先生はじめ現地の人達の願いであったアフガニスタン国内診療

所が開設され、そこに十名近いスタッフが派遣されたのです。開設されるまでの十年間、中村先生、シャワリー先生の苦労は並大抵のものではなかったようです。

現地への潜行調査、住民感情・地理的設置場所の調査、内戦状況調査など、この間に二名の犠牲者も出たそうです。

今年に入っては、現地の借り上げ建物の修理、医薬品・医療機具・生活用品・ベッド・寝具・鍋・手押しポンプ・食料品などの調達と輸送など大変なものでした。

ハリ治療をする林さん

先生の苦労を目のあたりにして

この様な努力によってJAMSの医療実績は会報でご存じの通り、昨年の二・五倍と増加しています。今後このような診療所がアフガニスタン国内各所に開設される計画ですが、これを支えるペシャワール会も大変です。

中村先生も苦労の連続で、心労（ストレス）のためか昨年夏より頭にピンポン玉大のはげが二個もでき、チトラル帽で隠しておられましたが、今年の春になってようやく完治したようです。私も毎日先生と生活する中で先生の苦労を目の当たりにしていますが気の毒で見ておれません。

日中は財政のやりくり、JAMSとミッション病院との医療面での苦労、対政府、地域との折衝など。夜は夕食をすますとミッション病院へ再度出かけて、術後患者・熱発者の回診、指示。その後、日本人スタッフの現地語の教育、夜中の十二時ごろ帰宅して、翌日のウルドゥ語のテキスト作り、報告書の作成などなど。

くつろぐ林さん、中村先生、島村さん、西岡さん

朝七時に起こすと「四時に寝たとやが」と眠そうな目をこすって起きてこられます。

「このような生活を続けては長生きできん。自分の健康は自分で守らねばいかんですよ。」と注意したところです。

一日も早く中村先生が事務仕事から解放されるように、事務のできるボランティアを送り込んでほしいものです。ペシャワール会も今後、財政面と人材確保など大変だと思いますが会員の皆様のご支援をいただき、現地スタッフにも豊かではなくても人並みの生活保障をし、医療面でも充分な治療ができるよう支援を続けていくことが必要です。私自身そのためには一層の努力と協力を惜しまないものです。

現地の人も私もゆっくりと変わってゆくのだろうか

ペシャワール・ミッション病院看護婦
福岡徳洲会病院所属
藤田千代子

ペシャワール会の皆様こんにちは。その後お変わりありませんか。

ペシャワールは時々気温が四十度を越えるようになりましたが、おかげさまで大病もせず元気に過ごしています。日本ではなにかと心配してくださり、いつも気にとめてくださって感謝しています。

去年と同じむなしさを感じて

もう五月も末になる。昨年の夏、帰国する飛行機の中で、この一年、私はなにをしていたのだろうかと、ふと考え、何もないと思えてむなしい気持ちになったことをよく覚えている。帰国を前にした今、やはり同じ思いになっている。ペシャワールへ来ようと決めたとき、私には特別優れたものがあったわけではなく、だから何か大きなことでもやろうと考えたことは一度もないし、また、できる力もない。それなのに、むなしいと感じるのはなぜなのだろうか。らいについても、まだまだわからないことが多く、言葉にしてもスムーズではない。こんな自分に何ができようか、と考えた時、そうむなしく感じることはないのかもしれない。

私はスタッフにたくさんの不満を持っている。どうして、もっと仕事をしないのか、から始まって、責任感がまったく無い、縦横のつながりがない、協力しあわない、同僚を褒めたり、かばったりした言葉を聞いたことがない、などなど。日本で、がっちりしたチームの中で働いてきた私は、自分の身の置き場に困り、いつまでもふらふらしている気分になった。今でもこの状態は変わっていない。

「現地の人と共に」の重さ

この中で、中村先生は『現地のスタッフを主として、外国人は脇役で』と言われる。そして、昨年は「日本人だけで仕事をしている。現地の人と共にやれ。あなたたちが主役ではない。」と厳しいお叱りをうけた。その時は傲慢にも、私たちは患者のために一生懸命やっているのにと思ってムッときた。しかし私たち日本人がいなくなったらこの仕事はだれがするのだろうという気持ちがいつもどこかにあった。私たちがいるときだけ作り上げられても、いなくなれば

手術に従事する藤田さん

すぐ形はなくなる。こういうところだとわかってきたとき、中村先生の言われる「共にやれ」の言葉がズシーと重い。一緒に仕事して十のうち一つでも残れば、それでよしとし、また、次の年に一つをと、これの繰り返しなのだろう。現に、患者の足の消毒、器具の消毒、検温票の記録など、中村先生の指導されたことが形になって継続されている。何年かかってのことだろうかと思うと私は恥ずかしくなる。昨年は、仕事始めに、あまり気ののらないスタッフに毎日「さあ、はじめようよ」と声をかけてきた。それでも効果なく時々けんかをしたりもした。そして疲れて、一年で諦めたように思う。今回は声をかけようという気さえなかった。ただ日本人ワーカーが三人になるのでこちらのペースに巻き込むことに期待した。

自分が変わってゆくきっかけ

先日ペシャワール会報三一号がとどいた。十六ページに『国際化とは、異質な人々と接することによって自分が変わってゆくきっかけをつかむことでもある。自分を変えようという意志がないところには真の国際化はない』（阿部謹也「世間意識からの解放」より）とあった。国際化についてはよくわからないが、ここを読んだとき、私のつまづきはここにあったのではないかと思えてきた。日本の文化の中で育ち、ぽんとペシャワールにきて、その頭で物を考え、今まで書いてきたような不満を持ち、どうすることもできないような気持ちにまでなる。

現地のスタッフを決して嫌いではない。私の未熟なウルドゥ語を根気よく聞いてく

酷暑の前のひととき

ペシャワールミッション病院看護婦　松本智子

パキスタンの夏は酷暑という事だったので、常に不安と期待が同居していました。そしてペシャワールの街にもついに暑い夏がやって来ました。

患者さんの部屋は、外気を入れない様に（外気温の方が高いため）、窓もカーテンもしめきって、その上電気も消して、昼間だというのにまっくらな部屋のベッドに横たわり、ただ天井の扇風機だけが忙しなく動いているだけでした。

事前に聞いていた話だったので、こう暑くては、クーラーはないし、これが賢明な対策なのかもしれないなと勝手に納得したり感心したり……していました。

しかし、その暑い日々もそう長くは続かず雨が降って急に涼しくなったりで、まだまだ酷暑を迎えていない様な感じがします。幸運にもこの2・3日少し肌寒く、5月も終わりだというのに、快適な日々を過ごさせてもらっています。こちらの人が雨の日や、くもりの日を良い天気というそうですが、こういう表現の仕方があったとしてもここでは不思議ではないという思いを今実感しているところです。

藤田、松本さんとスタッフのサダーカット氏

れ、生活のこと、健康のことなど、よく心配してくれる。一人一人とても気持ちの優しい思いやりのある人達だが、仕事になると、なぜかそれぞれのつながりがなく責任感が見事なほど無い。

私は、仕事の日は口で言っている以上に胸の中では不満を言ってきた。そしてどうしたらいいのだろうと思い、なにかモヤモヤしたまま、一日が終わり、これの繰り返しである。ペシャワール会報を読んで糸口をつかんだような感じがする。私は性急すぎるのかもしれない。この国の大きくゆったりとした時間の中で、現地の人も私もゆっくりと変わってゆくのだろうか。

らいの仕事と似ている。

再び模索の時を与えられて

日本で生きてきた生き方に違う方向から光をあてられ映しだされた毎日

理学療法士　島村教子

パキスタンですごした日々が、遠い幻のように思われる。思い出をたどるにはあまりにも短い月日であった。

言葉も技術も現地での研修から始まり、「らい」という病気の知識さえ頭の中には充分残っていないまま仕事をする生活が始まった。そしてすべてが中途半端なまま帰国してしまった。スタッフの誰一人とも挨拶さえできずに夜中飛行場へ向けて車は動き出していた。

ペシャワールで残すはずのものは、こんな形ではなかったはずなのに…と思う。多くの時間と費用をかけて研修を受けさせてもらい送り出されたのに…と思う。無念さや申しわけなさだけが残っている。もうおそらくペシャワールの土を再び踏むことはないとわかった今、急には次の目標が定まらないでいる。かの地ですごした日々が、まだ重くのしかかりちょっと息苦しい。押しのけるには思いきった動きが必要かもしれない。

日本で生きてきた生き方に違う方向から光をあてられ映し出された毎日であった。そのことが私を再びふり出しに戻し、新たな選択をすべく模索の時が与えられているように思う。

ドイツ人シスターと共に

これまで有形無形で支えて下さった皆様に心より感謝いたします。また私が行っているということで、ペシャワールを知り覚えて下さり支援をして下さった皆様にも一層の感謝をいたします。そしてどうぞ私という個人は一会員に戻っても、これまでどおり会員として支援を続けて下さることを願っております。ありがとうございました。

'91 会計報告

①個人・一，三二二件、団体・九八件
②絨毯等販売益
③現地及び国内購入の医薬品、医療機器、ＪＡＭＳ運営費
④スタッフ渡航費、薬品、機材送料、障害保険料
⑤国内研修費用、講演等旅費

●1991年度会計報告

[収入の部]		
1．会費及び寄付	①	20,015,920
2．事業収入	②	233,500
3．利息雑収入		56,332
計		20,305,752
前年度繰越		1,714,314
合　計		22,020,066
[支出の部]		
1．現地活動費		
1) ＪＡＭＳ活動費	③	13,865,415
2) 渡航、通信費	④	2,280,155
3) 国内活動費	⑤	805,387
小　計		16,950,957
2．事業費（会報制作、発送）		1,931,004
3．事務局費（家賃、事務用品）		2,115,523
計		20,997,484
次年度繰越		1,022,582
合　計		22,020,066

●1991年度特別会計

Ⅰ　外務省ＮＧＯ補助事業

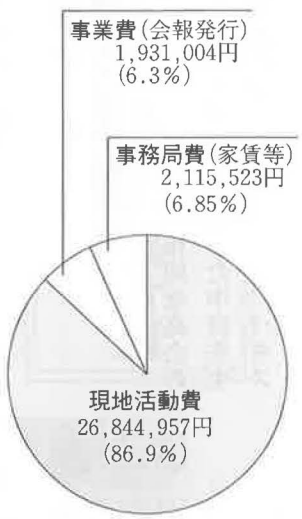
[収入の部]	
1．外務省ＮＧＯ補助金	6,344,000
計	6,344,000
[支出の部]	
1．ＪＡＭＳ巡回診療経費	4,284,000
2．医療器具費	2,060,000
計	6,344,000

Ⅱ　国際ボランティア貯金配分事業

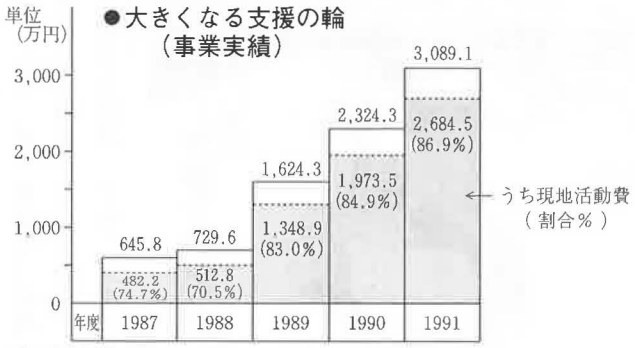
[収入の部]	
1．国際ボランティア貯金配分金	3,550,000
計	3,550,000
[支出の部]	
1．テメルガル診療所運営費	3,550,000
計	3,550,000

●1991年度事業額（支出ベース）

30,891,484円



●大きくなる支援の輪（事業実績）



●1991年度に寄付をいただいた団体

ありがとうございます

板付北小学校４年２組
九州芸術工科大学
古賀高等学校緑十字会グループ
こひつじ幼稚園
産業医科大学
西南学院
西南学院高等学校インターアクトクラブ
西南学院高等学校
西南学院中学校宗教部
西南女学院短期大学
西南幼稚園
筑紫女学園高等学校
筑紫女学園中学校
梅光女学院宗教部
広島三育学院幼稚園・小学校
福岡高等学校
福岡女学院高等学校
福岡女学院中学校
アジアを考える会北九州
うら梅の郷会
粕屋新光園
風の学校
北九州医療療従事キリスト者の会
京都JOCS
ししのこキャンプ
城山荘
日本アフガニスタン協会
日本医療情報センター
日本キリスト教海外医療協力会
馬場病院とBBコンペ
福岡キリスト教女子青年会
ペシャワール会八代友の会
むなかた自由大学
八尾ペシャワール会
九州大学医学部同窓会
西南学院高等学校後援会母の会
西南学院中学校母の会
全国医系学生ゼミ
福岡高等学校同窓会
福高紅梅会
朝倉記念病院
宇治徳洲会病院
馬場病院互助会
八尾徳洲会病院
国際ソロプチミスト北九州西
国際ソロプチミスト日田
国際ソロプチミスト福岡南
福岡鶴城ライオンズクラブ
福岡西ローターアクトクラブ
福岡ローターアクトクラブ
尼崎バプテスト教会
大牟田正山町教会教会学校
香住ヶ丘バプテスト教会
九州中高生聖書学校
西南学院バプテスト教会
田隈バプテスト教会
天神聖書集会
鳥栖キリスト教会婦人会
日本キリスト教会下関伝道教会
日本キリスト教団津屋崎教会
日本キリスト教団幕張教会
日本聖公会福岡教会
東八幡キリスト教会
平尾バプテスト教会
ビンセンシオ．ア．パウル会
福岡聖書研究会
福岡筑紫野伝道教会
福岡中央教会
福岡ベタニア村伝道所
福岡南教会
明林寺
八幡鉄町教会
龍国寺
島郷調剤薬局
で逢い
マツオ電機商会
三菱商事 EPOCS
レディスまさひろ

中村医師の活動を支える会から JAMSを中心とする事業体へ

●事務局長に就任して

ペシャワール会事務局長　村上　優

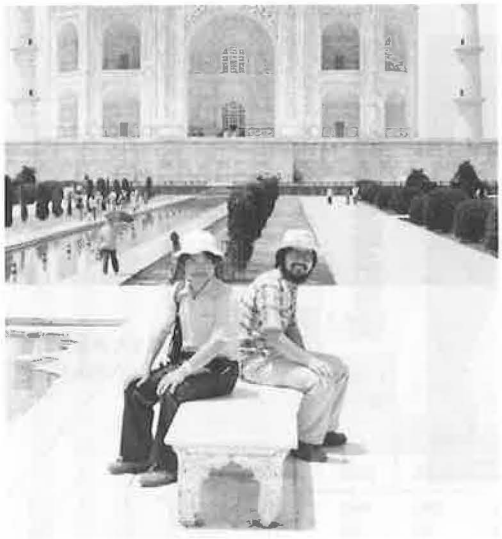
ペシャワール会は大きな転機にさしかかっています。これまでの中村哲医師の活動を支える会から、彼の地で働く日本人ボランティアの支援、そしてペシャワールで働く六十人からのアフガン人医療関係者の活動と生活を支える会に脱皮しています。それはミッション・ホスピタルを中心としていた医療活動から、JAMSを中心とした活動に広がったことをさしています。らいの治療に留まらず、アフガン難民の診療、さらに戦火が収束し始めているアフガン国内の復興を医療面より支持するために診療所（ダラエヌール、テメルガール）が開設されて活動しています。

中村医師がパキスタン北西辺境州のらい根絶計画に参加した時に、今の活動が予想されたでしょうか。それは歴史に流されながらも、地道に医療活動を続けてきた到達点のように思えます。であるが故に、引き返すことができない点でもあります。

会も、故佐藤雄二先生をはじめとして地道なボランティアの事務局員によって作られた自助グループ的な心地よさに加えて、理事会を発足させ組織としての体裁も整えつつあります。支えているプロジェクトの大きさから、安定した活動、特に財政面での安定を計りたいからです。しかし、現実は財政的な困難があり、今回会員の皆さんに緊急アピールをさせていただいた次第です。一つは新たな会員の紹介を、二つにはアフガン国内の診療所開設プロジェクトに募金を呼びかけています。

パキスタン――中村先生との不思議な縁

一九七九年六月、その前年福岡登高会のティリチ・ミール登山に参加した中村先生と登高会の池辺さんに連れられて、パキスタンの地を訪れました。イスラマバード空港の入国審査は、粗末な机があるだけの広間でおこなわれ、「何もないめまい」という表現が頭をついて出てくる情景でした。ペシャワールを経由してアフガンに入る予定が、直前に始まったソ連のアフガン侵攻でカイバル峠の国境が閉鎖されたと聞き、ギルギットに変更してフンザに入ろうという話になりました。その頃まで「国境」とは日本で考える「国境」だったのです。人工的に作られた「国境」を超えて人は生活



中村先生と村上事務局長（一九七九年）

していることを、中村先生の著書で知ったのは、随分後になってからです。この一ヵ月の旅行の途中にこんな会話がありました。恐らく生命を巡る話（脳死）だったように思いますが、「精神科の医師は、生きている間の援助はおろそかにして詭弁を弄する。死ぬときも諦めが早すぎる。そして解釈などへ理屈が多すぎる。」というものです。延命などの「無駄な」医療に湯水のごとくに金を使う一方、安い薬すら手に入らずに死んでゆく人達がいる。彼は著書の中で「その後の不思議な縁の連続は、五年後にこの北西辺境州に私を呼び戻した……余りの不平等という不条理に対する復讐でもある。」と述べています。まだペシャワールの赴任など夢にも出てこない時期に、彼の中では確かな何かが始まっていたように思います。そして私もその「不思議な縁」につながっているようです。

私とペシャワール会

中村先生がペシャワール行きを決め、一九八四年に会が発足し、活動が始まり、そして様々な人の輪が広がってゆく中で、私は受身的にしか参加していませんでした。私の窓口は事務局長をしていた佐藤雄二先生でした。彼は会の発足した年に、私の勤めている国立肥前療養所に戻ってきました。

「哲チャンが走るのよ」等とぼやきながら、中村先生の手紙を見せてくれたり、総会（の後の飲み会）に誘ってくれたり、あの心温まる人柄はスパスパと切り開いてゆく中村先生と対照的で、絶妙のコンビでした。佐藤先生が亡くなられたときに、私にできる範囲の手伝いをしようと決めました。彼の生と死は多くの人に伝説を残しました。それが「縁」の一つになって、佐藤先生の後を継ぐことになりました。しかし私には出来ないことが多すぎます。多くの仲間と助けていただく人々を要します。宜しくお願いします。

（国立肥前療養所医師）

募　集

ＪＡＭＳ発
「共に歩む」ワーカーを!!

JAMSでは日本からのワーカーを募集しております。ただし、JAMSは出来上がった団体ではなく、熟練した医療技術者の腕の発揮できる日本の医療現場からは程遠いものです。これから、現地事情に合わせ、現地の「人づくり」を目指し、一緒に築き上げてゆこうとするものです。「高度の技術を教えてやる」のではなく、「共に歩む」ワーカーを歓迎します。

送り出す日本の社会は一般にゆとりなく、短期の協力でも大きな困難があります。私共は現地でこれらの方々の便宜を図ることしかできませんが、以下の条件で受け入れます。

① 募集対象：

1．医療技術者（医師、看護婦(士)、検査技師、理学療法士など）。又は事務関係者で外国語（英語又は現地語）の堪能な者。

② 6カ月以上の滞在者は、現地で1カ月、ペルシャ語またはパシュトゥ語又はウルドゥ語を習得、現地の人々と交わりを深めて仕事をしていただきます。

③ 派遣団体などからのサポートのない場合、ペシャワール会派遣とし、1年以上の方は、現地の住居の便宜、及び現地生活費と日本からの往復交通費などを負担します。

④ 学生などの短期見学も拒みません。但し、ゆきとどいたお世話をするゆとりがありませんので、依存せずに独力で来て下さい。（繁忙期には断ることもあります）

詳しくはペシャワール会事務局に直接お問い合わせ下さい。

〒810　福岡市中央区大名1丁目10-25
上村第2ビル307号
ペシャワール会
電話（毎水曜日夜7時～9時）
092-731-2372
〔分室〕
092-725-3440（石風社内）

◉各地からの報告

より身近に現地を知るために　各地で頑張ってます

今年もペシャワール会総会・各地報告会の季節になりました。もうすぐ十年になる会の活動ですが、今では会員数も増え、全国に広がりを見せています。各地での報告会も、中村先生の現地報告で活動をより身近に感じることが出来、出席された方々に強いインパクトを与えています。日頃より熱心に活動しておられる各地からの報告と、今後の報告会の予定をお知らせします。

●熊本ペシャワール会

会長　吉永公祐

＊現在では会員百七十名に

旧ソ連邦軍のアフガニスタン侵攻が激化し、家を焼かれ村を破壊されたアフガン難民が多数ペシャワールの地に逃れ、連日ニュースをにぎわせていた一九八七年二月、熊本ペシャワール会は発足しました。このころパキスタン北西辺境州のペシャワールの地に、ご家族といっしょに住まわれ、難民たちの医療奉仕に取り組んでおられる中村先生を知った会員たちは、すでにその支援活動をつづけておられた福岡ペシャワール会の有志の方より、会の活動状況や、中村先生への支援運動などについて知らせていただき、もし自分たちにもそのご支援が出来るならばと、組織をつくり第一歩をふみ出してみました。発会当時は約二十名程の会員でしたが、その後、会の趣旨に賛同していただく方も次第にふえ、現在では百七十名を数えるようになりました。当時、新聞やテレビの記事で知るだけだったアフガニスタン戦争のことも、中村先生の現地でのハンセン氏病患者とのかかわり合いや、故郷を追われた難民たちへの援助活動を聞かせていただくことにより身近なものと考えることが出来るようになりました。先生も帰国されるたびに、ご多忙の時間をさいて熊本ペシャワールの会に出席していただき、スライド上映などで、現地の様子をわかりやすく話して下さるので、私たちが持っている日本人的発想を根本から見直さざるを得なくなるようです。「目には目を」のイスラム世界における報復主義を現実としてとらえ、ややもすれば西欧人的な発想でこの地の生活を眺めようとする自分に、基本的なものの見方を教えられるようです。熊本での活動は地味ではありますが、会員の皆様のご支援により五年を過すことになりました。毎月事務局に集まり、支援活動の輪をどのようにひろげて行くかを語り合い会員の輪をふやすための取りくみを話し合っています。本会の出発に多くのご支援をいただきました佐藤赫子様が昨年逝去されました。会員一同心よりご冥福をお祈り致します。佐藤様のペシャワールの会への思いを引きつぎ、今後とも頑張りたいと思っています。

＊熊本ペシャワール会

日時　七月十八日㈯午後六時

場所　熊本市水道町福祉会館

TEL（〇九六）三五五ー五二四一

●八尾ペシャワール会

八尾徳洲会病院　蔵所麻里子

＊中村先生との橋渡しが出来れば

今年も講演会の季節がやって来ました。なんとかまた、一年やってきたなあというのが我が八尾ペシャワール会のメンバーの本音です。

年一回の講演会のためにだけあるような会です。大きなことは出来ませんが、講演会を通じて、初めて中村先生の活動を知る人、初めて直接お話しする人達の橋渡しが出来ればと思い、月一回B4コピー一枚の会報発行、その発送作業のための会合、細々した募金活動を行っています。コピー機を借り、講演会の資金を出してもらったりで、八尾徳洲会病院には知らない間にボランティアになって頂いています。

悩みの種は、まず会報の原稿集め。福岡からの情報を頼りにいつも四苦八苦しています。それからスタッフの少なさ。約五名で百名程の方に会報を送らせて頂いていますが、会合に全員揃うことはまずなく、同じ方に二通送ったり、毎月届かなかったりで御迷惑をおかけしています。会費は頂いておらず、切手を送ってくださる方々の善意で成り立っています。

こんな会ですが、まあどうにかなるわ、で今年も夏です。今年こそはの意気込みはどこへやら、講演会のポスターの原案もまだやわ、発送日にまにあうんかいなと、同じ夏を迎えつつあります。皆様、呆れずに今年もお越しください。

＊八尾ペシャワール会
日時　八月二十二日(土)午後六時三十分
場所　八尾市文化会館（プリズムホール）
四階第一会議室
（近鉄大阪線八尾駅下車
徒歩五分　西部百貨店隣）
TEL（〇七二九）二四―五一一一
連絡先　八尾徳洲会病院・蔵所

＊これからの各地報告会――――

●北九州八幡
［北九州アジアを考える会］
日時　七月二十一日(火)午前十時三十分
場所　東八幡バプテスト教会
TEL（〇九三）六五一―六六六九

●福岡市・ペシャワール会総会
日時　七月二十五日(土)午後二時
場所　福岡メディカルホール
博多駅前一の四の四
TEL（〇九二）四一一―五八五五

●神戸
日時　八月二十三日(日)午後一時三十分
場所　神戸多聞教会
連絡先　JOCS関西事務所
TEL（〇六）二〇二―六二八六

●北九州小倉［北九州国際交流協会］
日時　八月二十九日(土)午後二時～四時
場所　スミックスホール
小倉北区許斐町一番
TEL（〇九三）五八三―三八五〇
連絡先　㈶北九州国際交流協会
TEL（〇九三）五五一―〇〇五五

ダラエ・ヌールへの道――国境越え

JAMS顧問医師　中村　哲

デュランド・ライン……＊

ペシャワールは三カ月ぶりの雨であった。ミタイ峠にさしかかるころから冷たい雨はみぞれとなり、さらに雪となった。雪は容赦なく顔に吹きつけ、我々一行はまるで雪だるまの群が歩いているようだった。しかし、埃っぽいペシャワールの空気に閉口していた一行には、心洗われるような純白の眩しさが新鮮であった。

デュランド・ラインに立つ中村医師とJAMSスタッフ

麓から約三時間登ると、この峠の頂きに標識がある。登山路のケルンのような質素なものだ。スタッフのサルフラーズが、「デュランだ！」と叫ぶ。

「デュラン」とは「デュランド・ライン」の現地なまりで、パキスタン－アフガニスタンの国境線を指す。（かつて大英帝国の至上命令は「インド防衛」であり、インド亜大陸の西北辺に「北西辺境州」を設けてロシア南下の防波堤とした。現在のパキスタンに属する一州となっているが、これは現地パシュトゥン部族の居住地を真っ二つにするものであった。彼らによれば歴史的災いの種である。「デュラン」は現地住民には特別な響きがあるのである。）我々は既にアフガニスタン側に入っていた。降りしきる雪の中、JAMS（日本－アフガン医療サービス）のスタッフたちの顔が白雪で一層輝いて見えた。

内部クリニックの開設……＊

一九九一年十一月二六日、私は四人のJAMSのスタッフを伴って、早朝ペシャワールを後にした。我々の任務は開設予定地の最後の状況調査と計画の最終決定にあった。モハマンド自治区から標高二五〇〇メートルのミターイ峠の麓に至り、徒歩でアフガニスタンのクナールに入ろうとしていた。折悪しくゲリラ組織同士の戦闘で道路網が遮断され、車両による輸送が困難になっていたからである。アフガニスタン内部診療所開設計画もこのために大幅に遅延していた。だが、三年間このために切磋琢磨したきたアフガン人チームを鼓舞するためにも、私は断固たる最終決定を迫られていたのである。

アフガニスタン内部のクリニックの開設は一九八八年末より慎重に計画され、一九八九年一月一日に診療員養成コースを開設、開設予定地から直接人材を抜擢して訓練を施し、混乱する情勢の沈静するのを待機していた。一九九〇年十一月に北部国境のテメルガールに支部を開設して交代制の人員配置を組織化して経験を蓄積し、アフガニスタン国内診療所開設に備えをしてきた。

一九九一年になって内乱が下火となり、相対的な政治的安定の兆しを見るや、本格的な準備段階に入った。国内診療所第一号の開設予定地をクナール河の支脈、ダラエ・ヌール渓谷の下流に定め、開設時期は十二月一日としていた。八月と九月に二隊が偵察を兼ねてフィールド診療を行った。

この目標地域はクナール河沿いの渓谷で、ペシャワールから見ると丁度スレイマン山脈を挟む西側に当たる。我々がこのあたりを標的に選んだ理由の一つは、ペシャワールで登録されるアフガン

人らい患者の約半数以上がクナール河沿いの住民であることであった。しかもその約七〇～八〇パーセントは「ダラエ・ピーチ」という北西部の盆地に集中している。らい根絶計画における一大標的である。だが、ダラエ・ピーチはアラブ系のワッハーブ派が勢力をもっており、大金と軍事組織で事実上半独立状態を保ち、堅固な要塞さえ築いている。当面の接近は不可能であった。

そこで、南部の山脈（クンド山系）を隔てて隣接するダラエ・ヌール渓谷に拠点を定め、年余をかけて同渓谷のモデル診療態勢を築き、情勢の鎮静するのを待とうと言う訳である。その間にダラエ・ピーチの住民は三々五々峠を越えて来ることが当然予想されるから、情報は自ずと集まる。政治勢力が自壊すれば一気にダラエ・ピーチに進出することが出来るし、混乱が続いた場合でもダラエ・ヌール側でケアすることは可能である。

もう一つの理由は、ダラエ・ヌール渓谷一帯はいわゆるパシャウィー族というヌーリスタンの一部族が占め、ほぼ完全な自治体制を戦争中も敷いて政治的利害から自由な地域であり、複雑な政争に巻き込まれる可能性は少ない。また地理的にも、ペシャワールからジープで約十時間、徒歩で二日という、当面の輸送に比較的困難が少ない安定地域だったのである。

政治党派の抗争の中で……＊

だが予想を裏切る政治的混乱で連絡が途絶えていた。第三次の斥候隊が戻って来た十月から政治党派の抗争がさらに激しくなり、カイバル峠に代わる主要交通路、ナワ峠が閉ざされて一カ月が過ぎようとしていた。ＪＡＭＳは常に慎重論を優先して無用な冒険は極力避けてきたものの、現地住民に対して裏切りと取られる事は避けねばならない。延期論と開設論と意見が分かれたが、私の持論は「既にサイは投げられている。小規模な活動を予定通り実施し、情報を集めながら無理なく拡大、数十年の積りで現地に根を生やせ」というものだった。

しかし、開設のための下調査では、渓谷の人口や内戦による被害状況の把握が正確でなく、漠然とした印象で語られることが多かった。実際に計画立案となれば、活動規模を決定するためにも、財政支援を頼む日本側を納得させるためにも、より確かな目で現地調査をせねばならない。そこで私自らが開設地域の踏査を行い、最終決定を下すことになったのである。

ＪＡＭＳのリーダーのシャワリ医師は過度に私の身を案じていた。

「今ナカムラ先生に何かあるとＪＡＭＳ自身が潰れます。らいセンターの患者にも、日本の友人たちにも申し訳がたちません」

「バカを言うな。今がタイミングだというのは分かりきっているではないか。俺たちは失対事業で六十人のスタッフを養っているのでない。立案をいい加減にすると来年度のメドが立たない。第一、たかが党派のこぜりあいでＪＡＭＳが延期を重ねれば、住民は我々を国連の同族と見なし、笑いものになる」

実際、国連や援助団体の撤退につぐ撤退で、地元住民の間に外国不信のムードが拡大していた。さほど危険がなければ先ずは地元住民の信頼を得ることが大切であると判断された。それに三年にわたる地元との接触や調査で、決して無謀なアフガニスタン行きとは思えなかった。

国連・欧米諸外国の「アフガニスタン復興計画」の完全な破産が明らかになる中、ＪＡＭＳの主要メンバーは国内復興のための医療計画に逆に血をたぎらせていた。

弾薬を薬品に変え……＊

峠は下りとなった。アフガニスタン側から幾隊もの武装ゲリラが登ってくる。舞い降りる小雪の中、自分も山賊のような出で立ちの我々は、ライフル銃や弾薬を背負う一行とすれ違いながら、「スタレイ・マッシュ（お疲れさま）」と挨拶を交わしながら下りに向かう。

ＪＡＭＳの一行もまた、かつては郷土を防衛するゲリラであった。一九八八年にソ連軍が撤退するまで、彼らも武器弾薬を担いでこの道を往復していたものである。しかし、今や立場が変わっていた。郷土を守る目的は変わらずとも、彼らは武器を医療に、弾薬を薬品に変え、戦乱と復興援助騒ぎで荒れた村を再生するムジャヘディン（聖戦士）であった。

（続く）

●事務局だより

＊中村先生、藤田さん、松本さんが七月初旬に無事帰国しました。中村先生の話によると、難民の家族が、連日数千から万の単位で帰国をはじめているようです。一台三千ルピー程度で雇ったトラックに、家財道具一切と羊を満載して、一路故郷をめざす長蛇の列は、やはり感動的だったとのことです。難民の現実的な帰還の動きが、鳴物入りの国連の帰還プロジェクトの失敗や各国NGOの撤退の後に起こっているということを、私たちは決して忘れてはならないと思います。国連やNGOだけでなく、現地の人々のことを忘れて、自らの政治や宗教やイデオロギー上の利益や思惑でのみ動くものは、必ず腐敗するということを、再度肝に銘じておきたいと思います。

＊先日の緊急アピール「『アフガン国内診療所』計画にご寄付を！　新会員をご紹介ください！」に対して、多額のご寄附とたくさんの新会員のご紹介をいただきました。ありがとうございます。（寄付の額や新会員の数は次号で紹介します）。「アピール」にも述べましたように、財政問題については「背水の陣」で臨まねばなりません。引続きご支援をお願いいたします。

【㋮村から】

※事務局に行くようになって五年目。主に、会費の入金状況の入力、それを元に会報発送準備をしています。編集長の「〇月〇日、会報発送予定!!」の号令に、未入力の入金票を抱え、「間に合うかな……」と内心冷汗かきつつ、皆様のお手元に無事、会報が届くことを願って作業をしています。楽しいこともいっぱいあるんですよ!!　ちょっと来てみませんか？　気づいたら、パソコンの前に座っているのは、私でなく、あなたかも……。（佐伯）

※㋮と書いて「マルペ」と読みます。これはペシャワール会を意味し、いろいろな使われ方をします。例えば花見の時は「㋮花びら浮かべてどんぶり酒」などと銘うち、ダンボールに㋮と大書きして席を取ります。また事務局員がまとまって飲みに行った場合、店の中でかなり目立ってしまうというパターンが多いため、当会の名誉のために、暗号・隠語としても用いられているようです。（マスードン）

〔お願い〕当分の間、郵便振替と手紙は従来通り福岡YMCAペシャワール会宛でお願いします。

（〒810 福岡市中央区天神一丁目10－24 福岡三和ビル4F 郵便振替 福岡9－6559 ☎七八一－七四一〇）

●アジアの辺境から放たれた痛烈なメッセージ

●増補版

ペシャワールにて
――癩そしてアフガン難民

中村哲著　四六判上製二六〇頁　価一八五四円

ペシャワールについて語ることは、人間と世界について総てを語ることであると言っても誇張ではない。貧困、富の格差、政治の不安定、宗教対立、麻薬、戦争、近代化による伝統社会の破壊、およそ凡ゆる発展途上国の抱える悩みがここに集中しているからである。悩みばかりではない。我々が忘れ去った人情と、むきだしの人間と神に触れることができる。

（著者「あとがき」より）

石風社

福岡市中央区大名1－2－15
電話092(714)4838 振替福岡4-25227

会則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。

④会員は一口年額三、〇〇〇円、学生会員一口一、〇〇〇円、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。

⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。

役員の改選は毎年総会にて行う。

⑧毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。

⑨本会の事務局をFARA HOUSE（〒八一〇 福岡市中央区大名一丁目一〇－二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三一－二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810 福岡市中央区大名1丁目10-25 上村第2ビル307号　毎週水曜日夜七時例会
☎・FAX（092）731-2372　郵便振替　福岡9-6559　〔分室〕☎（092）725-3440（石風社内）
発行年月　1992年7月25日　No.32　会長 問田直幹　事務局長　村上　優